

社会福祉学における対話と価値

—議論ではなく会話でもない、対話により創造される価値—

○ 埼玉県立大学 梅崎 薫 (2707)

キーワード3つ：対話 安全 聴く力

1. 研究目的

社会福祉援助において、価値は知識や技術より上位と考えられているが、価値について再考し創造する場やその条件についてはあまり検討されていない。筆者は高齢者虐待を予防する地域づくりのために高齢者福祉施設や地域で、高齢者や孤立しがちな女性や男性、思春期の子や親など多様な世代の人々と修復的対話トーキングサークルの会を定期的を開催し、対話の会に参加した人たちがエンパワメントされ、その過程において、対話の場から新たな思考や価値が生まれた様子を経験した。本研究では、なぜ修復的対話の場でこのような変化が生まれ、価値創造されたのか、トーキングサークルの対話構造、担い手に求められる役割や原則、特に経験的に重要だと考えられている点等を、他領域の対話に関する知見から考察する。

2. 研究の視点および方法

新たな思考や価値を生み出すには、「安全である」と感じられることが、その条件のひとつとしてあげられている。価値創造を可能にする対話に関連するシステム思考、対話型組織開発、知識経営、安全に関する精神神経科学、生物学などにおける知見を手掛かりに考察する。

3. 倫理的配慮

カナダ、およびフィンランドにおける修復的対話に関するインタビュー調査に関しては、埼玉県立大学研究倫理委員会より承認を受けて実施した（承認番号 30035）。

4. 研究結果

修復的対話トーキングサークルの対話構造、担い手に求められる役割や原則は、以下の通りである。カナダ先住民のピースメイキングサークルがルーツの対話で、参加者が輪になって座り、対話の担い手キーパーが対話を主導する。キーパーは対話の結論に責任を持たず、一参加者として対話に参加する。トーキングピースという話し手を示す物を持つ者だけが発言できる。トーキングピースは時計回り、その反対回りで全ての参加者に等しく手渡されるが、参加者は話したくなければ話さなくてよく、そのまま次の人へと手渡す。お互いを尊重し、相手の話をよく聴く、発言する者を非難しないことが修復的対話のルールで「聴く」と「話す」を分ける対話構造をもつ。初回には必ず、お互いを尊重する安全な対話の場にするために必要なことを語り合い、その後も繰り返しテーマとする。参加者全員で安全に関する主観的な信念や考え、気持ち等を語り、共有する。問う際に、言葉カード等を用いて、参加者に自分の考えを即興的に語ることを求める。キーパーは、対話の結論を導こうとせず、ただ聴く。参加者は、自分の順番が来るまで発言を保留するため、通常の会議や話し合いと異なり、話が離散し拡散していくように感じられる。キーパーは、そのような不確実性に耐え聴くことを促す。

システム思考の研究者メドウズは、産業革命以降、西洋社会は直観や全体論よりも科学や論理、還元主義から多くを得たが、社会関係などの複雑なシステムの場合は全体に対する直観を取り戻すべきだと主張した。部分を理解し、相互のつながりを見て、将来的な可能性を問えば、システム再構築できる。しかしその後の対話研究から、人は効率性や安全性に不安があっても心理的安全性がないとその問題を話し合えないことが分かった。物理学者ボームのモデルに基づき、アイザックが安全な状況のある対話を行い、発言の許容範囲の文化的ルールが一時的に停止される状況、すなわち話したくない時は話さなくてよい「保留」という関わり方を含む対話の場に安全が感じられるとわかった。ボームが示したモデルはピースメイキングサークルである。以降、様々な思考、価値、活動を源流として、対話型組織開発研究は進められている。

「安全である」という感覚について、精神神経科学者ポージェスは、人間には、意識の及ばないところで環境中のリスクを評価する神経的なプロセスがあり、そこにおいて「安全である」という感覚的な合図を受けると、生理学状態が変わり、人は自然に社会性を発揮するようになると説明する。この「安全である」という感覚は、社会的交流の中で感じられる必要があり、「聴く」ことがトラウマをも回復させると言う。生物学者の長谷川は、人間の特殊性は蓄積的文化にあり、未熟な状態で生まれた子とその親は、双方がお互いの存在をモニタリングして、何かに働きかけようとする力を獲得すると言ひ、それを心の共有と呼ぶ。生物として、直感や情動に関わる認知運動系は、論理を議論する情報処理系よりも人にとって自然な営みであり、安全を感じるはずだと言う。

知識経営の野中は、価値創造には利害対立を超えたコミュニティ創造が必要で、そのためにはコミュニティの人々の知識を共有して新たな知識（衆知）を創造し、関係性を変革して、新たな価値を継続的に創造すべきだと訴える。お互いの尊厳を認め合い、人間同士が共通して持つ倫理的・道徳的な価値観（共通善）を創造すべきだと言うのである。しかし日本では、共通善と言え最大多数の最大幸福や公共の福祉、正義と言え道徳的・倫理的なものとならぬと捉えがちで、欧米における個人の権利という捉え方の理解が日本人には難しいだろうと述べている。

5. 考察

修復的対話トーキングサークルは、その対話構造、担い手に求める役割や原則等において、安全が感じられ、お互いを尊重して違いを共有するので、価値創造の対話の場として期待できるのではないかと。深く聴く力が求められ、援助者と被援助者という枠組みを離れ、人として水戸的な正義や価値を語る。これまで、日本にはあまりなかった対話の場かもしれない。価値に関し、野中が指摘する日本と欧米における価値、正義の捉え方の違い等は今後の課題である。

参考文献：梅崎薫「修復的対話トーキングサークル実施マニュアル」はる書房 2019：メドウズ著、枝廣淳子訳「世界はシステムで動く」英治出版 2015：ブッシュ&マーシャク著中村和彦訳「対話型組織開発」英治出版 2018：ボーム著 金井真弓訳「オン・ダイアログ」英治出版 2007：ポージェス著 花丘ちぐさ訳「ポリヴェーガル理論入門」春秋社 2018：長谷川眞理子「世界は美しく不思議に満ちている」青土社 2018：野中郁次郎・廣瀬文乃・平田透「実践ソーシャルイノベーション」千倉書房 2014